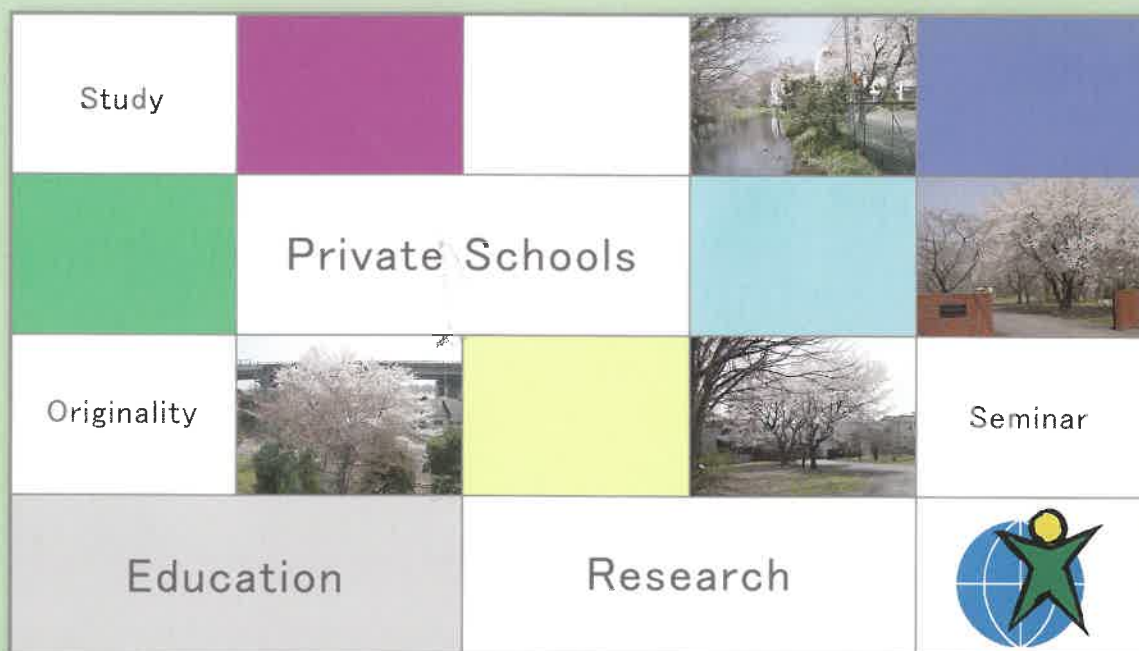


日本私学教育研究所 紀要 第56号

The Bulletin of the EIP SJ Vol.56 June/2020



2020-6

一般財団法人 日本私学教育研究所

The Education Institute for Private Schools in Japan

主体的、対話的で深い学びを通じた探究型英語授業

ータブレットで行える評価ルーブリックを通してー

岡田 惇志 初芝富田林中学・高等学校

1. はじめに

本校は2018年度より、「超進学校化宣言」¹の下、学校改革を実行しており、その柱のひとつが、「授業力」「指導力」の更なる強化である。大学入試において、英語のテストがどのようになるか流動的である中で、本校は4技能のバランスのとれた「骨太の英語教育」の実行を掲げている²。私も今回この研究を行うことで、そうした指導力を更に高め、生徒に還元していきたいと考えている。

2. 研究の目的

私は2016年度、高校1年生を対象に、現代社会の諸問題について調べ、英語でまとめて発表する探究型授業を、ネイティブの教員とのチーム・ティーチングの形で行った。これは2年下の学年（現在の高校2年生）からセンター試験に代わる新テストが行われることを受けての先行導入の意味合いがあった。大学入試の自由英作文の問題などを参考にテーマを作成し（表1）、個人やグループでのプレゼンテーションや、ディベートを行った。授業を随時公開するだけでなく、通信を作成し（図1）、校内の多くの教員に取り組みを知ってもらった。そうした中で見つかった課題としては、発表後の振り返りの活動が生徒まかせになってしまい、折角発表をして見つかった課題が次の発表にあまり活かせなかったということ、そしてもう一つは生徒ひとり一人がタブレットを持っているという環境ではなかったため、発表でPower Pointなどを使う際は、情報教室のパソコンを利用するしかなく、発表準備の効率が悪かったことである。

表1 自由英作文の問題からのテーマの選定

大阪大学 2007 年度入学試験問題 ³ 「あなたが今までに行ったことのある観光地で、もう一度行ってみたいところはどこですか。その理由とともに、70 語程度の英語で述べなさい」 →高校1年生のプレゼンテーションのテーマ 「あなたが行ってみたい国や地域について紹介するプレゼンテーションを5分程度で行いなさい」
--



図1 授業での取り組みを教職員に伝える ICT 通信やアクティブ・ラーニング通信

本年度、中学1年生の授業を担当することが決まり、校長先生によるカリキュラム・マネジメントの結

果、中学の英語の授業においても、5単位のうち1単位をネイティブ教員とのチーム・ティーチングになることも決まった。また生徒も一人ひとりがタブレットを所有しているという環境も整ったため、上述の反省点を活かし、6年間英語での探究型授業を行うことで、生徒の学習到達度の向上と、キャリア教育に貢献する取り組みを始めた。

3. 実践方法

3-1. 発表方法とテーマの設定

中学1年生から英語で発表を行うためには、越えなければならない課題がいくつかある。1点目は、人前で発表することへの抵抗感（緊張や自信のなさ、間違いへの恐れからくる声の小ささなど）を和らげることである。そのために、最初の発表は人前での教科書の朗読、更にはペアを作ってダイアログを発表することから始めた。回を追うごとにペアから個人、テキストやプリント、資料を見ながらの発表から、暗唱やジェスチャーを入れての発表へと、スモールステップを踏んでいった。2点目は様々な発表形式を経験させることである。自分で作成した英文を用いて発表を行うと、語彙や文法のエラーや正しい発音ができているという問題が多く発生し、他の生徒に的確に内容を伝えることが困難となる。そのため、最初は教科書の英文など、全員が内容を理解できているものを使った発表から始め、次第に自分で書いた英文を用いた発表へと移っていった。また内容を伝え易くする目的のために、Power Pointなどで図や表を示しながら発表する手法も取り入れていった。そうした段階の踏み方をまとめたものが下の表2である。

表2 発表テーマと方法の推移

	テーマ	既出学習内容	発表の方法	備考
1学期	ペアでダイアログを朗読	I am / You are の文	ペア・教科書を見ながら	
	個人で英文を朗読		個人・教科書を見ながら	
	ペアでダイアログを暗唱	He is / She is の文 What is の文	ペア・暗唱・教科書の英文	
	個人で英文を暗唱		個人・暗唱・教科書の英文	
2学期	少し長い自己紹介をしよう	一般動詞 (1・2人称)	個人・暗唱・自作の英文	
	世界の国について発表しよう (校外公開授業)	一般動詞 (3人称単数)	グループ・メモを見ながら・自作の英文	Power Point 使用 図書館や Internet での調べ学習
3学期	様々なテーマで発表しよう	様々な疑問詞・現在進行形・can・過去形	個人・メモを見ながら・自作の英文	Power Point 使用 個人で発表することにより、発表の量が増加

3-2. 英作文指導

中学1年生においては、使える語彙や文法も限られているため、自ら作成した英文で発表するという作業は大変難しいものとなる。指導においては、自分が読めない語彙を使って発表をしても、聞いている生徒は理解することはできない、自分が知っている語彙や文法を使って発表しよう、ということをネイティブ教員とも打ち合わせを重ね、徹底した。辞書を極力使わず、表3のように平易な文にしていこうという指導を、机間巡視をしながら個別に行っていた。

表3 中学1年生が聞き取ることのできる平易な英文を作成する指導

「ロンドンの人口は800万人です」	
中学3年生レベル	The population of London is 8 million.
中学2年生レベル	There are 8 million people in London.
中学1年生レベル	8 million people live in London.

3-3. 発表の評価と振り返り

発表の評価は、1人称の評価（発表中にタブレットで撮影した動画を自身で見返す）、2人称の評価（発表を聞いたクラスメイトにコメントシートを書いてもらい、それを集計する）、3人称の評価（発表を見たネイティブ教員から助言をもらう）の3方向から行うこととした。

こうした評価方法は3年前の高校1年生対象の授業でも行ってはいたものの、一人一台のタブレット導入により、よりきめ細やかな活動へとブラッシュアップすることができた。発表動画は以前、教員用タブレットで撮影していたため、見たい生徒が同時刻に確認することができなかったという点が改善できた。一番改善することができた点であり、今回の研究の主幹となることは、特に2人称の評価をポートフォリオとしてタブレットに蓄積させることである。従来の方式では、クラスメイトからコメントを書いたシートを受け取るとそれを一瞥し、おおまかな感想を持つという振り返りで終わってしまう生徒が大半であった。図2のようなExcelシートに「声の大きさ」、「英語の流暢さ」、「表現力」、「内容」などといった項目のクラスメイトからの5段階評価を入力し、その平均値を見ることで、自身の弱点にも気づき、またその推移から改善の取り組みが功を奏しているか考察することができる。50分の授業時間の中で、従来は1日で全員の発表を終わらせることを優先していたため、振り返りの時間が十分に取れていなかった。現在は、50分のうち30分を発表、20分を振り返りの時間としている。その時間にExcelシートを完成させ、改善点を考えて再度練習する活動まで行っており、希望者はその時間中に、再度改善点を盛り込んだ発表に挑戦する時間もとっている。

中学35期 英語 発表評価シート		11月	9日		
内容	グループでパワーポイントを活用して発表する				
テーマ	世界の国々について紹介する				
パートナー/グループ					
①クラスメイトからの評価					
	声の大きさ	英語の発音	表現力	内容	合計
②先生からの評価					
③自己評価					

図2 発表ポートフォリオシート

4. 現状の成果と課題

中学入学当初より、こうした取り組みを継続して行うことにより、教員が英語で授業を行うこと、また自分で英語を使って話すことへの抵抗感がある生徒は少なくなった。またそうした点から一般的に3人称単数形を学習する中学1年生の2学期頃から多くなっていく、「英語嫌い」の生徒も、アンケートの結果よ

り、少なくなっていることがわかった。

11月に本校で行われた公開授業において、教育関係者、在校生の保護者、卒業生など様々な方に授業を見ていただき、指導員の先生や校長先生など、多くの方々にご意見を頂戴する機会をいただいた³。そこでご指摘いただいた現状の課題としては、自作の英文を用いて発表をする際、英文の流暢さが低下し、「カタカナ英語」のような形になってしまうという点がある。これも、タブレットを用いて自身の発音を録画、録音し、正しい発音を意識する指導を強化するとともに、ネイティブ教員と協力し、個別の発音指導を更に行っていくものとする。

5. 終わりに～今後の展望

2学期の後半の発表では、「世界の国について発表しよう」というテーマで、諸外国の様々な文化、風習について図書館やインターネットで調べ学習をし、Power Pointを用いて発表した。現在中学1年生では、発表の下地となる知識や情報の収集を目的とした新聞学習を行っている。新聞をスクラップし、国際問題や社会問題など、様々な問題について自らの意見をまとめ、発表するという活動を、総合学習の時間を用いて実施している。この活動と、現在私が英語の授業の中で実践している取り組みをリンクさせれば、SDGsをはじめとする数多くのテーマで、英語を使って意見を述べるという力を養うことができる。

本年度本校より、第2回 Change Maker Awards（一般社団法人英語4技能・探究学習推進協会主催）の近畿大会に本校から2つのチームが出場し、SDGsをテーマとした英語プレゼンテーションを行った。これは、本校の英語科教員が連携し、学年の英語授業担当者、教科主任・副主任、ネイティブ教員が協力して指導にあたった成果でもあるが、出場した生徒たちは、英語が得意な生徒、プレゼンテーション能力に長けた生徒、学習成績の優秀な生徒が有志で参加したものであった。

今後、今回の取り組みを継続的、発展的に行っていくことで、あらゆる生徒が、世界の諸問題について意見を交換する力を伸ばしていくことができれば、本校の育てたい人物像のひとつである「国際社会に貢献し、活躍できる生徒」の育成に更に貢献できると考えられる。

¹ 本校の「超進学校宣言」については初芝富田林中学・高等学校 HP を参照

(<http://www.hatsushiba.ed.jp/tondabayashi/special/reform.html>)

² 本校の「骨太の英語教育」の実行については本校校長の SPECIAL MESSAGE Vol.05 を参照

(http://www.hatsushiba.ed.jp/tondabayashi/special_message/vol05.html)

³ 公開授業の振り返りについては本校校長ブログ 2019年12月5日を参照

(<http://www.hatsushiba.ed.jp/tondabayashi/blog/4939.html>)

最終閲覧日 2020年2月3日

参考文献 武知千津子編著, 2017, 『阪大の英語 20 ヶ年[第6版]』 教学社